

生徒の学習意欲を高める中学校社会科の授業づくり

ー ARCSモデルの「関連性」に着目して ー

学籍番号 (169982)

氏名 (牧野 実佳)

主指導教員 (寺嶋 浩介)

1. 背景

近年、国際的にみて日本の若者は学習に対する「意欲」や「自己肯定感」が低いことが指摘されている。その要因のひとつとして、学習者が学習することへの意味を見いだせないまま学習している現状が見受けられる。また、その意欲が低いまま、学校での学習についていくことができなくなり、中学校では不登校になる生徒も多い。

また、平成20年度中学校学習指導要領解説社会編でも学習意欲の向上が重要視されている。つまり、本日の学校教育には、児童生徒の学力をつけるとともに、学習に対する「意欲」を引き出すことが求められているといえる。

2. 学習意欲（動機づけ）について

学習意欲とは「自ら学ぼうとする気持ち」のことである。また心理学の分野では「動機づけ」という言葉がよく用いられる。この動機づけという言葉には二つの意味合いがあり、一つは、他人を動機づけるという意味と、もう一つは個々の動機の基礎にある基本的な欲求という意味である（市川, 2001）。

しかし、教員が授業の中で動機づけの理論を活用することは難しい。それを解決する1つの方策として、インストラクショナルデザインを用いたものがある。インストラクショナルデザインとは、教育活動の効果・効率・魅力を高めるための手法を集大成したモデルや研究分野、またそれらを用いて学習支援環境を実現するプロセスのことである（鈴木 2015）。

インストラクショナルデザイン理論のひとつに、アメリカの教育工学者、Keller (1979) によって提唱された ARCS モデルがある。ARCS モデルは、学習者の学習意欲に関する心理学的研究をカテゴリー化し、授業の魅力を高めるための実践的な手法をまとめたものであり、学習意欲を注意 (Attention)、関連性 (Relevance)、自信 (Confidence)、満足感 (Satisfaction) の4つの要因でとらえたものである (Keller 2012)。

R-1 目的指向性	どうすれば学習者のニーズを満たすことができるのか？ 意義のある目標設定，将来的価値の指摘，今努力することのメリット（有用性や意義）の強調，安心感や心地よさを与える
R-2 動機との一致	いつどのようにして学習者の学習スタイルや興味と関連づけられるか？ 学習活動自体を楽しませる，友達との共同作業，班対抗の競争，ゲーム化，目標達成の手段を自分で選ぶ
R-3 親しみやすさ	どうすれば学習者の経験と授業を結びつけることができるか？ 親近感の持てる（身近な）例，学習者の関心のある得意分野からの例，これまでの勉強とのつながりの説明，比喩やたとえ話，学習者を名前で呼ぶ

3. 実践内容

第2章では歴史的分野の授業での検証を行い，データ収集の不足や，「関連性」を向上させる方策の不足が課題となった。しかし，授業観察やインタビューで見つかった課題に対してのアプローチが出来たことで，アンケートの結果に関しては数値を上昇させることができた。

第3章では第2章での課題を生かし，より具体的な方策を行うことで，第2章の授業実践と比較して，より良い授業実践をすることができたのではないかと考える。しかし質的なデータ収集を試みたにも関わらず，効果的に検証することが出来なかったため，今後の研究において改善が求められる。

4. 成果と課題

これらの2つの授業実践ではARCSモデルの理論を活用したが，実際の現場では常に理論のことを考えるのではなく，目の前にいる生徒たちの反応を見ながら授業をおこなわなければならないと，予定していた計画が出来ない場面が多かった。計画していた授業デザインにこだわるのではなく，生徒の反応や様子に従い計画を調整していく必要があると感じられた。今後は，アンケート結果や数値だけで研究を行うのではなく，生徒との関りも含めてこのARCSモデルの研究を続け，生徒の学習意欲を高めることを探究していく。